

第八章 海外文学の受入れ

一 大正期の思潮

さて。

大正時代の文学は、大体大正八年を境として、それ以前と以後との二期に分つことが出来る。

明治末期から大正前期にかけて多彩な運動を展開し、社会に大きな影響を与えたものに白樺派があった。已に述べたように、武者小路実篤を以って代表するこの派は、また別に人道主義派と呼ばれた。それはたゞ真一文字に、人間本然の姿を掌握しようと努めた。そこに第一義的なものを見出し、それによって感得した信念を、現実にあてはめようとしたが、彼らの前途を阻むものに因襲的な道德と社会とがあった。彼らはこの両者に挟まれて甚だしい矛盾を感じていたが、それでも一切の妥協を排斥し、最初の目標を変えずに前進した。即ち真実の人類共存に対する人間愛のみが、人間を解放し、人類を結合するものと考えたからである。それは子供のような無邪気さがあったが、実にまじめであり、宗教的信念にさえ燃え上っていたから、読者をして自然主義の陰影から救ってくれた。

武者小路は、この白樺派の主潮をあくまでも堅持したが、その他の人々は必ずしも同じ作法を採ったものとは云い難い。例えば志賀直哉は、武者小路が観念的抽象的傾向が強かったのに対し、感覚的具体的であり、これを支え

るに近代的合理主義の良識を以ってし、配するに高度な倫理性を以てした。

有島武郎は、宗教特にキリスト教の信仰と性欲との相剋に悩み、本能的な生活の究明と、理性的な理想の追求に活路を見出さんとしている。

また里見弴の如きは、この人道主義を更に具体的に「まごころ主義」を以て表わさんとし、たとえ惡として見られる行為でも、主体的な真実、即ち「まごころ」があれば、凡てが善になるといふ立場をとっていた。

こうした白樺派の宗教的な要素をうけついだ準白樺派、準人道主義派の人々に倉田百三、吉田絃二郎がある。

これらとは別に新ロマン主義派が抬頭した。これはまた一名耽美派とも云われ、すでに自然主義の全盛期に活動を始めていた。それは自然主義の発生と同じように、理想探求の途上でつまづいた結果、懷疑的、虚無的になると共に、現実の上でも困惑と悲哀を感じた。絶大な自然の前に、今更ながら微力である人間の本质を認めたが、さればとて人生を見捨てるわけにはいかぬ。どうせまゝならぬ人生なら、せめて官能的な感激を味わい、感覚的陶醉をおぼえようというのである。そうしてこうした行方を求めて歩んだのが、永井荷風と、谷崎潤一郎の二巨豪である。これら白樺派の観念的な理想主義にあきたらず、さればとて、永井、谷崎らの耽美主義を快よしとしない一群の文筆家は、「新現実主義」なる旗印をかゝげて世に現われた。この一派は、大体大正の中期に傑出したものが多く、文学者のうちには、大正中期から後期にかけての作家の総称とするものもある。それは兎も角としてこれらの人々は雑誌「新思潮」に立てこもったので、「新思潮派」とも云われ、また理智派とも云われた。即ちその名称が指す如く、透徹した理知の目を以て、ありのまゝの人生を見究めようとするにある。従つて事実に対して批判的であ

り、これから発生する情緒や心理を素直にうけとめて更に、調和的なものへの処理に進み、精神的な展開を全面的に計ろうとした。そうして此の派に属するものが菊池寛、芥川龍之介、久米正雄等である。

この他、文学史家によつては技巧派と称する一派を設けるものもあり、これには久保田万太郎、佐藤春夫などを挙げ、更に前述の「新思潮」の牙城によるものから、里見弴、久米正雄、志賀直哉、芥川龍之介などを抜いてこれに加えている。

それは兎も角としてこれら著名の文筆家は等しく海外文学に親しみ、その影響をうけているから、当然その輸入と紹介という問題が起きて来た。

この西洋文学書の紹介について、柳田泉が先に引用した『『学鑑』今むかし』のうちに委しく述べているから、それから必要な処を拝借して左に記して見よう。

(略) 明治の末近く迄の間の「学鑑」と言ふものは、形こそ小さかったが、その内容に於て立派な独立した一雑誌をなしてゐたかの観がある。決して只の宣伝雑誌と言ふだけのものではなかった。丁度その頃は日本の文壇は、日清戦争後新たに世界的舞台にのり出して来ようと言ふ準備の為に、鋭意西洋文学をとり入れてゐたものだ。その西洋文学紹介の機関となつたものには、「帝国文学」があり、「太平洋」があり、「太陽」があり、「学鑑」もその一つであつた。「帝国文学」の海外騒壇では、上田敏、登張信一郎等の諸氏が、或は翻譯によつて或は評伝によつて歐洲大陸の新しい文学を紹介し、「太平洋」の西花余香では、田山花袋がよく西洋小説の読後感想をのせた。これに対して「学鑑」は、内田さんが、よく善。六と言ふ名によつて西洋文学書の新刊

紹介や名著紹介をやったものだ。その他勿論「太陽」や「新小説」等でも海外文芸を、それぞれ紹介した。ゾラ、ドーデー、フローベル、バルザック、イブセン、トルストイ、ツルゲーネフ等々は勿論、ニイチエ、ハウプトマン、ゾーデルマン、モーパッサン、シエンキウィッチ、ヨークイ、ダンヌンチヨ、少し後れてゴルキイ、メーテルリンク等がこの頃から紹介されて来た。この海外文学紹介の際に「学鑑」は実に大きな水先案内の役割をはたしたのである。勿論この頃は図書雑誌、読書雑誌の類が少なかったので自然「学鑑」がこの方面に乗り出して来たと言ふ事情もあらう。又その編輯者が内田不知庵と言ふ權威ある批評家であったから、人が喜んでその言ふところに傾聴したといふ事情もあらう。ともかく「学鑑」は海外文芸紹介の一權威であった。内田さんが「学鑑」に紹介する様な本は、文芸家、読書家の必らず手にすべきものであり、何人でも内田さんの紹介を読んだ人は、その原本を手にする事の一日も早からんことを欲して、争うて丸善に注文するという有様であった。だから内田さんは別に本を買へ、買へとは言はなかったけれども、何時の間にか立派に宣伝広告の役目を最も有効に果してゐたと言ふわけだ。(略)

内田魯庵は大正初期の海外文芸書紹介に大きな功績を残したことは、この文章からでも察しがつくが、それにしても丸善が、彼にとっては、男の働き場とも言える「学鑑」の編集を委ねてくれたからでもあった。内田魯庵にしても魚が水を得たかのように「学鑑」に一身を托した様子は、容易に想像することが出来る。そしてこの意味では、内田魯庵と「学鑑」とが、一体となって海外文学の紹介に努力したとも言えよう。

ところで丸善の古老には、実に記憶のいゝ人が居るが、その中の一人で、明治三十七年から大正七年ごろまで

イツ書を担当していた、福本初太郎の記憶によると、大体次のような名士・知識人が来店して、洋書を漁っていたものようである。

姉崎正治 青木周蔵 馬場孤蝶 千葉鈺蔵 江原素六 江木翼 榎本虎彦 K・フロレンツ 藤井健次郎 富士川游 藤岡勝二 福田徳三 後藤新平 橋田邦彦 秦豊吉 八田三喜 早田文雄 堀江帰一 星亨 細川護立 穂積重陳 穂積重遠 市河三喜 出隆 井上十吉 井上哲次郎 入沢達吉 石田幹之助 石原純 石川千代松 板倉卓造 伊藤博文 岩村透 岩下壮一 河合栄治郎 R・ケーベル 紀平正美 木村謹治 小寺謙吉 小泉鉄 児島喜久雄 小宮豊隆 朽木綱貞 九鬼周蔵 楠山正雄 桑木厳翼 桑木彥雄 前田利為 牧野英一 松井等 松居松翁 松村任三 松永村 三木清 水上滝太郎 南弘 三浦謹之助 三浦新七 三宅雄二郎 森鷗外 向軍治 武者小路実篤 武藤長蔵 長与善郎 中島徳三 成瀬仁蔵 夏目漱石 西田幾多郎 新渡戸稲造 野口米次郎 大口達三 大石正巳 岡田武松 小此木真六 大西祝 小野俊一 小野塚喜平次 小山内薫 乙竹岩造 大塚金之助 尾崎行雄 佐藤昌介 里見弴 志賀直哉 下田次郎 下村弘 白鳥庫吉 孫逸仙 杉村楚人冠 杉浦重剛 高田早苗 高村光太郎 高島平三郎 竹越与三郎 田村寛貞 田中阿歌麿 田中耕太郎 田中萃一郎 田中館愛橘 田山花袋 寺田寅彦 戸川秋骨 徳川家達 徳富蘇峰 留岡幸助 戸水寛人 鳥居龍蔵 戸坂潤 坪井正五郎 坪内逍遙 鶴見祐輔 都築馨六 生方敏郎 上田敏 上田萬年 上田整次 浮田和民 渡辺千秋 渡瀬庄三郎 山崎覚次郎 柳宗悦 柳田国男 吉野作造(以上一二三名 アルファベット順)



丸善洋物陳列場

社員姿の和服

この表を見て直ちにわかることは、明治年代已に鬼籍に入つた伊藤博文や大西祝などが記入されているのに反し、愛書家の市島謙吉や阿部次郎、建築家の今井兼次などの名前が落ちてゐる。それにしても徳川家達などは鉄輪の馬車に乗って書物を買ひに来るといふ豪勢さで、流石に十六代將軍の貫禄充分であつたという。

そのころの顧客及店員の風俗については、文房具係をしていた井筒静之助の手記の中に、髻髯たる描写があるので次に採録して見よう。

当時は和服の御客様が大多数でありましたので、正面及南側入口には下足番を置いてありました。今では何処の商店へ行っても土足のまゝ自由に入場が出来ますが、その頃は靴の方以外は全部備付の赤緒の麻裏草履に履き替えて御入場願つた訳で、駒下駄、日和下駄、朴齒下駄、雨の日の足駄、こうもり、蛇の目傘、番傘等が玄關先にツラリと並んで居た光景が、今尚、臉に残って居りますし、下足番の

扮装が、襟に「丸善株式会社」背に㊦を白く染め抜いた印半纏、腹掛、股引、白緒の草履と云うイナセなスタイルも、印象深く、なつかしい思い出であります。

一方、丸善社員の服装は？ と言いますと、やはり、殆んどが和服―縞の着物に角帯姿でした。和服姿の番頭さんが英語を喋り、タイプライターを叩き、計算機を操り、和服姿の小手代、見習生が自転車に乗り箱車を曳くと言う有様。時代と言いますか、これが躍進時代の丸善の姿でありました。

その躍進時代にも店員の中には笑えぬ笑話が随分あったものようである。先きに述べたように夜学校で英語を勉強した彼らは、外人相手の商売にたずさわっていると云う矜持から、それ相応に勉強したもののようであるが、それでもオーソドックスな発音や、教科書の学問では、スラングやなまりの多いアメリカ人では一寸つき合い兼ねた。それに際物などを持ち込まれては、何んとしても扱い兼ねた。丸善の知恵者であった田中二郎でさえ、時には誤りを犯していたのであった。彼が書いた「丸善の横顔」なる小冊子に

際物には常に注意して居るのですが時にはお客が先に問ひ合せに來られて面喰ふことがあります。昭和の始めの頃のことでしたが、よく外国人の婦人に

Have you got any Mah-jong Book?

ときかれました。最初の間はこのマージャンと云ふのが何のことか判らず、何度もきゝ直したり、紙を出して書いて貰ったりして、支那の「麻雀」と云ふ遊びだと判ったのは少したってからでした。こんな訳で麻雀の遊び方などは日本で最も早く知った方でしたが、これが流行る頃には既に本の売行きは止つてゐます。クロスワ

ドバズルなども同じ事で、日本の雑誌や何かに書かれる頃にはそれ迄相当出てゐた原著の売行きは止ります。また今から思ふとをかしい事です、専門家は別として私共はレイヨン（人絹）と云ふ事が判らず、字引を引いても却々出て来なく正体が判らない時代が あつたものです。

と記している。

新築当時の赤煉瓦の社屋は、一階が洋品・文房具・和書の売場になっており、入口を入れて正面に階段があり、これを昇ると二階が洋書の売場になっていた。階段の右側には応接室があり、左側には鉤形に曲つた一部が事務室に当てられ、これに境した陳列場の一隅に貴賓室があつた。特別な客は応接間に通して洋書閲覧の便を計っており、安成貞雄などはよくこの部屋を利用して勉強したと云う。徳川公が来店すると、わき目もふらずに一階の洋品売場を通り抜けて階段を昇り貴賓室に入った。専属の店員が御用を承つては一々洋書を運んでお目にかけたと云う。前田利為侯夫人も常連の一人で、いつも鉄輪の人力車に乗つて来店した。勿論貴賓室組であつた。丸善ではこうした知名人の応対に當つたのは幹部級の店員であつたが、一般顧客に対する店員の応対についても丁寧・親切をモットーにして、厳しいものがあつた。電話による注文についても、その承け応えが喧ましく、見習生たちの指南番であつた奥役の多門^{おおかど}伝十郎などは口喧ましいので有名であつた。ついでながら地方の顧客や同業者からの注文について、元社員間宮不二雄の明治三十年代の頃についての思い出話があるから、参考のため、その要点を掲げておこう。

お客さんから注文がありますと、まず在庫品があるかどうかを調べてから、その有無をお知らせしてから必要かどうかを聞きます。その時本店にはないが地方の支店にある場合は、そこから取り寄せて御用に応じま

すが、それでも間に合わない時は外注をいたしました。凡て丸善が直接海外の出版社に発注しました。その外、地方の得意先から当店の出版物でないものの注文を受けた時は大変でした。何しろサービスばかりではなく商売なのですから、同業者の間を廻って買い取ってくるのです。私たちはこれを「セリマン」（書物を探して廻ること）と云い、「とりもの帖」「せりもの帖」を懐にして店を飛び出すのです。その出で立ちも大変で草鞋ばかりに印半纏を着て、鉄道馬車にも乗らず、文字通り東奔西走しました。一番遠い所では浅草の古本屋浅倉屋、神田の朝香屋、医学専門書は本郷の金原、南江堂、南山堂、吐鳳堂などを駆け廻り、近くは英語研究社、博文館に立ち寄って、その他生薬学や小薬学のような薬学書から、櫛の産婆学にいたるまで、それこそ注文があれどどんな種類の書物でも買い求めて来なくてはなりません。そうしてこうした仕事は大体午前中に終えて帰ってくるのです。集まった本は、他店から頼まれた分も一諸に積み合せて地方に送ると云う寸法です。尚、一寸販売価格の符牒についてコッソリお知らせしますと、誰が考え出したか知りませんが、一から十までをアカサタナ、ハマヤラワに当てています。例えば一円二十五銭なら「アンカナ」十円なら「アワン」と云う工合に。尤もそんな高い本なんかはありませんでした。

神田の古本屋で買った書物の、裏の見返しの隅に片仮名で書いた符牒をよく見かけるが、これが丸善のを真似たものであるとすれば、丸善はこゝでもその道の先駆者であるわけである。尤もその本尊の方はいつの間にかアラビヤ数字でハッキリ書くようになったが。

二 洋書販売成績

大正初期によく売れた本については福本初太郎のメモがある。先きに述べた如く、福本は明治末期から大正中期頃まで在職し、主として洋書の仕入・販売に関係していたから、その意味でこのメモは信用していいと思われる。それによると次のように分類されているが、これは特に売上げ順位によったものではない。即ち――

一、キリスト教関係書（他に西田幾多郎の著書の如き思想的な和書）

二、進化論に関するもの（ダーウィンの「種の起源」 Darwin-Origin of Species は、丸善が募集した十九世紀の欧米名著のアンケートで第一位を占めていた）

三、自由民権関係書（例えば J. S. Mill のもの、婦人解放問題に関係ある例えば Isen のもの）

四、社会主義及び共産主義関係書

五、富国強兵論関係（例えば Adam Smith のもの）

六、自然主義

七、人道主義

八、恋愛至上主義

九、その他辞書類（例えばマイヤー、カッセル、ネルソン、チャムバー等の「百科辞典」など・教科書類 Holle-

man-Organic Chemistry Organic, Inorganic Chemistry Watt-Text Book of Physics Smith-

Algebra)

今これを「学鑑」所載の新書目録並に「アナンスメンツ」広告によって分類すると次表のような結果を得る。

Classification	M. 45	T. 5	T. 10	T. 15	Classification	M. 45	T. 5	T. 10	T. 15
Theology & Religion	243	361	398	190	Mathematics	243	231	499	299
Philosophy & Psychology	494			361	Astronomy	30	146		43
Education	155	176	378	160	Physics & Natural Science in General	221	311	282	282
Sociology & Social Politics	398	347		480	Chemistry	305			188
Economics			86	922	Physiography & Geology	56	27	67	
Commerce	303	386		Natural History	280	236		323	
Law	298	188	163	246	Agriculture, Live Stock & etc.		256	298	236
Political Science	185	231		238	Chemical Technology & Manufactures	325	330	187	197
Statistics, Year Book etc.	2	300	538	24	Medicine	222	219	298	538
Languages	198			Engineering in General & Civil Engineering	294	11	352	454	
Encyclopaedias, Dictionary, Bibliography etc.	103			Mechanical Engineering	372	706			

Literature	413	266	1,279	408	Electrical Engineering	304	221	240
Novels, Fairy Tales & etc.	749	349		1,202	Mining & Metallurgy	137	248	73
Poetry				212	Naval & Military Science	90	88	50
Dramas, Theatrical Arts, Motion Pictures etc.	522	228		338	Automobile, Aeronautics, Machines etc.	65	14	56
Architecture		68		89	Geography, Atlas etc.	37		
Fine Arts	351		229	316	History	191	310	381
Musics	107	354		49	Biography	255		86
Amusements & Sports	72	107		145	Anthropology & Archaeology	49	60	102
Domestic Science & Etiquette	26	31	*138	69	Eastern Asia & it's Neighbors Japan & China	189	142	207
					The First World War		125	
					Italian Books			64
					Spanish Books			10
					Total	8,540	7,174	9,917

*music を含む。 M. 明治, T. 大正の略

尤もこの表の数字は、丸善が輸入した洋書の総数ではないが、これによって、或程度その時代の学問の動向乃至は洋書輸入の傾向を知る上での手掛りとなるだろう。